

千葉県印旛地方の社日信仰

梅原 達治

はじめに

筆者は前稿（梅原3）において、五神号Ⅱ五角柱型地神塔の関東地方における分布状況から、その伝播類型の一つを想定した。すなわち、それらが大江匡弼著『神仙靈章春秋社日醮儀』（一七八一年序、以下『醮儀』と略す）の示す様式にもとづいて造立されたものとするならば、（梅原1、2）そのような書籍を入手し、その教義を理解しうる人物と、その教義を一般の農民に示し、造塔や祭儀を実施させ得る影響力をもった人物の存在を考え、それらの人物がそれぞれの役割を果たすことにより、醮儀の示す造塔がおこなわれるようになったと推定した。この推定の背景には、阿波藩主松平（蜂須賀）治昭が徳島城下富田八幡宮の祠官早雲古宝の進言によって、領内各村浦に地神塔を造立するように布告したという事跡があり、それを一般化した機序を考えたにすぎない。そして、埼玉県児玉郡児玉町を中心とした地域に分布している一九基の社日塔も、そのような過程によって造立されたものと推定したが、それに関与した人物を見出すことはできなかった。いうまでもないが、『醮儀』に着目することと、祭儀を実行させるという二つの役割りが、かならずしも別個の人物によっ

て果されたとは限らない。

ここで『醮儀』の示す儀軌によって造立されたと思われる五神号^ニ五角柱型の地神塔などを、醮儀型と呼ぶことにする。さて、千葉県四街道市上野・上野神社境内に醮儀型地神塔があることは報じられているが、(平野、一九四頁、四〇頁、図一三四)これは単独に存在しているのではない。したがって、これを同地周辺の旧佐倉藩内に分布している社日塔の一つとして捉えれば、その造立の状況などの推定が容易になると思われる。つまり、同地域にみられる他塔の由緒などをこれらのものにあてはめることは、まったくの仮定による推定よりは説得力をもち得るからである。そのような予想のもとに、今までに知り得た材料をもとに、この地方の地神塔の造立時の状況などの復原を試みることにした。いうまでもなく、このような作業は、地元におけるより具体的、より詳細な検討の一礎石になることを念じつつおこなうものであり、決定的な結論を提示するものではない。

なお文献の引用に際して明らかに誤植と思われるものは修正してある。

梅原達治

一、千葉県内の社日信仰

関東平野の地神信仰は、春秋の社日にその年の豊作を祈念し、また感謝する祭儀をおこなうもので、ひろく年中行事に組み込まれている。しかし、現在の千葉県の民俗誌には、「地神^ニ」や「社日」の記載はあまり見られず、筆者の管見には『千葉大百科事典』の「社日参り」(高崎^ニ、四一一頁)と『関東の歳時習俗』および『日本の民俗』の「社日」(高崎^ニ、二〇四頁、高橋、他、二一八頁)の記述があるだけである。そこでは社日に石の鳥居をくぐって宮参りをする行事について述べてあり、農耕と結びつく信仰の具体的な記載はなく、鳥居との関連からか、『房総志料続篇』の望陀郡の三カ村^ニの習俗の記述(田丸、四六四頁)が引用されている。『房総志料続篇』には夷隅郡万喜城の麓の妙見祠の秋社の記述がみられる



写真1 天照皇太神碑，千葉県印旛郡富里町新橋，麻賀多神社境内（同町教育委員会撮影）

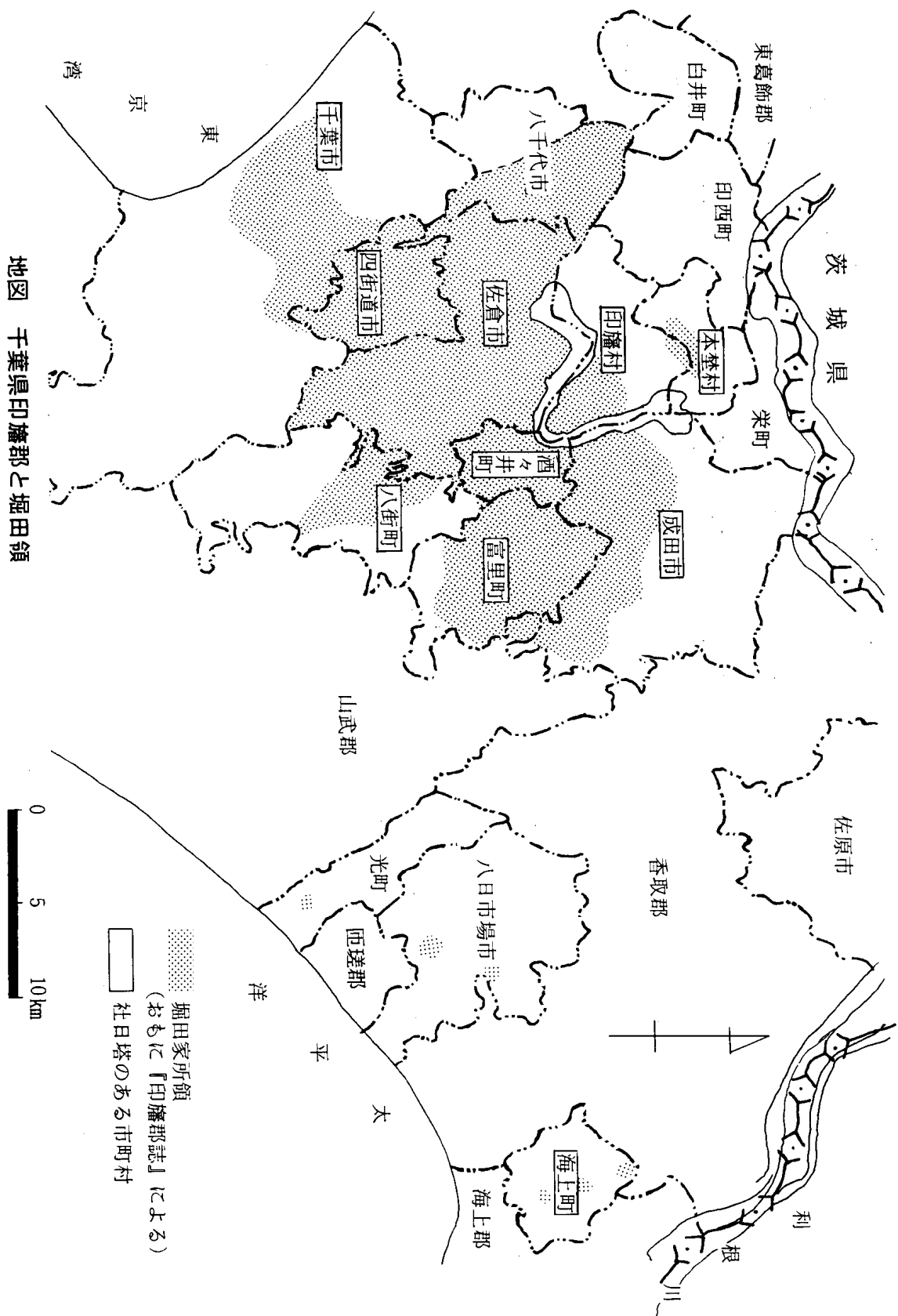
が、この秋社が秋分に近い戊の日の社日を指しているかどうか疑問の余地は残されている。

『南総珍』（渡辺、八四二〜三、八八四頁）も社日祭について述べているが、その社日は、現在われわれが一般に考えているものであり、神輿行事を含む秋社の祭りの俗化を指摘している。『房総志料』が長柄郡岩井村（現・長生郡睦沢町岩井）の秋社の神輿行事について「式甚嚴重」と記しているものと比較すると興味深い。『南総珍』の著者、渡辺寛は『房総志料』の著者、中村国香の孫であり、夷隅郡部田村（現・岬町部田）に育っており、同地方の状況を記した可能性がある。

さて、これ以外の文献上知り得た社日に関する資料は、海上郡海上町の「田ノ神祭り」の習俗と、四街道市の上野の地神塔の存在であった。しかし、前稿でも触れたように、『千葉県印旛郡誌』（今後、他郡誌をも含めて、千葉県を省略する。編集者名でも千葉県を略す）の神社の項には社日に祭る石祠の記載が散見される。（神社略誌参照）たとえば、現在は

成田市に属する公津村台方村字武蔵の無格社五社神について「天照太神少彦名命大己貴神倉稲魂命埴安媛命を祭る……社殿は石宮にして五方面三寸……」と記し（印旛郡、後一三四二頁）、それが醮儀型地神塔であることを推定させる。また、佐倉市史編さん主任であった故篠丸頼彦氏は同市内の五社さまに注目され、春秋の社日には五穀豊熟を祈る祭りが醮儀型地神塔の前でおこなわれる習俗に着目され、資料を収集されていた。（押尾氏による）

このような状況で、千葉県、あるいは房総地方に



おける印旛地方の民俗学上の位置などまったく不明ではあるが、印旛地方の地神信仰の由来を堀田氏の統治を中心にして考察を進めることとする。

注

- 一 『千葉県民俗地図』は地鎮(地神)様が屋敷神として太平洋岸の鴨川、勝浦そして富津市に分布し、また地神が路傍の神仏として松戸市にあることを述べているが詳細は不明である。(千葉県民俗文化財、六、四五頁)
- 二 『君津郡誌』は同郡平岡村三箇の神社として、八坂神社と御霊神社(ともに村社)をあげている。そして両社とも九月一日を例祭としている。(君津郡、九、六八頁)なお、平岡村野里は六給であり、そのなかに堀田(二一九石余)の名があげられている。(君津郡、一一七二頁)
- 三 『房総志料続篇』と『南総珍』のとりあげている祭礼はすべて秋社である。

二、佐倉藩

現在までに知り得た社日塔のおおよその分布を地図に示すが、その一例を除いて佐倉領内に限られている。これは観察によるもののほかに、私信および諸文献の記載を含めている。文献のうち中心をなすものは『印旛郡誌』であり、そのうちの八基のものが領主堀田氏の関与に触れている。

一五九〇年、家康の関東移封以来、関八州は將軍家のお膝元で、幕府の直轄地のほか徳川一門親藩・譜代大名に分割され徳川氏を支える柱となり、いわゆる雄藩大藩はみられなかった。(小笠原、他、一五二頁)一五九八年には、現在の千葉県にはほぼ該当する房総三國には一八名の大名が配置されており、そこで最高の石高を誇ったのは結城(現・茨城県)の結城秀康の一〇・二万石であり、大多喜の本多忠勝の一〇万石がそれに続いていた。幕末期の一八六九年には二三名の大名がおり、佐倉の堀田正倫の二万石が最高であり、古河(現・茨城県)の土井利与の八万石がこれに次いでいた。佐倉藩は一六九〇年、家康の関東移封にさいして三浦義次が一万石をあてがわれて入部したのにはじまったが、一六〇七年の小



写真2 地神塔，四街道市内黒田，熊野
神社境内（同市教育委員会撮影）

所領は下総国六郡、上総国一郡、常陸国三郡、近江国二郡からなっており、下総国印旛郡が城の所在地として中核をなしていた。しかし、このことは各郡一円を支配していたことを意味するのではなく、所領が四カ国一二郡にあったということとを意味している。（小笠原、他、一五四〜七頁）堀田氏の所領を現在確実に把握するにはいたっていないが、一〇〜一万石の大名として佐倉城を核とする印旛郡を中心としていたということはいえよう。『印旛郡誌』によれば、郡内の社日塔と思われるもののほとんどすべてのものは堀田氏の所領内にあるといえる。堀田氏と佐倉藩との関係については次項においてさらに詳細に触れることにするが、一七四五年老中になった正亮が、翌四六年佐倉に移封され、その後幕末にいたるまで堀田氏六代が佐倉領主であり、その時期に『醜儀』の出版があり、その封土内に醜儀型社日塔の造立がおこなわれたことをとりあえず述べておこう。さらに『郡誌』には現・印旛村内の六合村平賀村字宮前鎮座の村社宗像神社の境内社、

笠原吉次の入部以降、一時的に幕府の直轄領となつたこともあるが譜代大名の城地に固定し、（表二参照）川越、忍、岩槻などとともに、とくに老中の城地とされ、（小笠原、他、一五六頁）古河、前橋、高崎とともに、その城主となることは、幕府の重要な役職に就く階梯のようにさえ考えられるに至り、それを目指す大名は、これらの城主となることを望んで、城主の交替は江戸時代を通じて激しくおこなわれた。（児玉、他、一二八頁）一六二五年、佐倉藩主、老中土井利勝の一六二五年の石高は一四・二万石、

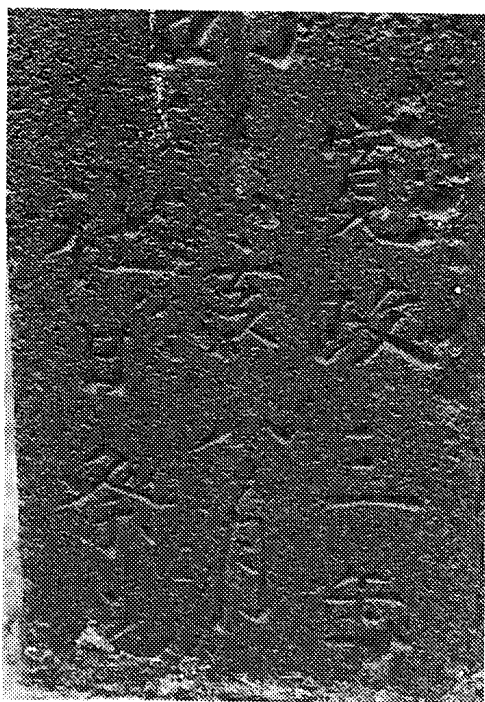
五社神社の由緒を「文化年中（一八〇四〜一八）旧領主堀田殿より御達に付社日為祭五穀成就仕来候」と述べ、（印旛郡、後一三八九頁）造立に藩主が関与したことを示している。社日塔と推測されるものの由緒を不明としたものも多いが、このような付達を特定の地域だけに指示する理由が判明しないかぎり、領内くまなく布告がおこなわれたと考えるほうが合理的であり、他の地域の社日塔の造営にも同様の要因が働いたとみるべきであろう。また、さらに推測を重ねることになるが、現在みられる社日塔の状況から、堀田氏の布告は、社日の祭祀は『醮儀』に則しておこなうように指示したと考えられる。

現在、佐倉市内には一三基の社日塔が知られているが、徳島県阿南市内には一五三基の地神塔がある。（阿南市）この場合、市域の広狭や村落数を無視して、地神Ⅱ社日塔の塔数だけを比較することはあまり意味はないが、阿南市を含め、徳島県や兵庫県淡路島ではほとんどの村落に地神Ⅱ社日塔があるが、印旛地方の村落にはかならずしも社日塔が祀られているとはいえず、社日塔のみられない集落は例外的ではなく、社日塔のある集落でも、その塔の存在が社日の祭祀とともに一般住民から忘れ去られているところもある。つまり、印旛地方における社日信仰は、徳島・淡路の地神Ⅱ社日信仰に比して弱く、それにたいする意識は低いという印象は拭えない。その要因の一つに領民の置かれた状況があると考えられる。

徳島県、つまり阿波国は蜂須賀家政が入国した一五八五年以来、また淡路国は一六一五年の加増以降、一八六九年の版籍奉還にいたるまで連綿として同氏の阿淡両国支配は続いている。治昭が地神祭祀の布告を発した年を一七九〇年とすれば、それまで同氏と領民の関係はやく一八〇年から二〇〇年の年月が経過しており、両者間には強い紐帯が形成されていたことが想像される。これにたいして、関東一円の采地の状況は「碁石まじり」というような言葉で示されていたように、支配地はたがいに入りこんでいた。一六一四年、安房の里見氏が伯耆国に移された後の房総はその一典型をなしていたという。（小笠原、他、一五九頁）幕末期の印旛地方の堀田領は印旛郡を中心に千葉郡に及んでいた。^(二)なお、さきに土井氏の

表一 旧領主石高

<p>千葉郡 更科村(現・千葉市内) (千葉郡、五三頁) 北部 堀田氏 一一七〇・四八九九 南部 戸田氏 一七九五・五三四二 印旛郡 川上村(現・八街町内) (印旛郡、前、三三一〜二頁) 堀田領 大谷流村 一九四・一一四 小谷流村 九一・四五六 根古谷村 二九五・四七 用草村 三六六・一〇一 岡田村 六五・二三 戸田領 勢田村 八〇 吉倉村 六〇余 東吉田村 二五〇余 下砂村 二五三余 上砂村 二四〇余 本郷村(現・本埜村内)</p>	<p>(印旛郡、後、六一〜二頁) 佐倉領 中根村の内戸崎藤方 二六五・六一一 角田村 一二九・二四六七 稲葉領 中根村の内辺田前 三一九・三一 笠神村 九九八余 龍腹寺村 二二五・二八 荒野村 三〇〇余 物木村 一九二余 滝村 九〇余 印旛郡(旧埴生郡) 遠山村(現・成田市内) (印旛郡、後、九五〜二頁) 佐倉領 畑田村 一七五・三六二 川栗村 二〇四・七六六 西吉倉村 一七二・八八一 山ノ作村 二四二・六八九 久米村 一六三・四四四 馬場村 八九・四〇一</p>	<p>田安領 大山村 二〇三・五四六 東吉倉村 一〇〇・五四七 駒井野村 三六二・九三三 東和田村 四八七・三九二 田安領 小管村 四〇〇 取香村 一八〇 長田村 二八〇 堀ノ内村 一〇〇 匝瑳郡 横須賀村(現・八日市場市内) (匝瑳郡、二〇頁) 篠田藤四郎支配所 五・七六五 堀田備中守領分 二七〇・一九一 多田三郎知行所 一八七・七五三 飯河善左衛門知行所 一一一・八八三 井上伊織知行所 二六・五六九 大河内鎌蔵知行所 四一・二四五</p>
---	--	---



a. 寛政3年(1791)銘



b. 天保6年(1835)銘

写真3 二紀年銘をもつ五穀祖
神塔、千葉県印旛郡八街
町大谷流(同町教育委員
会撮影)

石高について触れたとき、下総六郡と記しているが、一八八九年に郡の整理がおこなわれており、郡の数は減少し、以前の個々の郡域は現在のそれより狭いものもある。現在の印旛郡の東部はかつての埴生郡であり、堀田氏の所領はそこも含んでいた。佐倉城に近い地域はおおよそ堀田氏の領分にされていたが、周辺部や飛地での支配地の交錯状況の一例を表一に示す。現在は八街町内に含まれる川上村では藩領・旗本領という言葉が使われている。それは表一の堀田領・戸田領に該当するが、その由来は、一七〇一年に遡る。同年佐倉城主戸田忠真の弟、戸田忠章が分家、河内および千葉、印旛合わせて二一か村七千石を賜わった。そのとき、前述の地区が含まれていたが、禄高が一万石に達していなかったため旗本として江戸に居を構えていたことによって、両者が区別して呼ばれるようになった。(八街町、三五頁)本郷村(現・本埜村内)内の堀田領は、その北辺をなすものであるが、その中根村一村は佐倉領と稲葉領に分割されている。飛地である匝瑳郡横須賀村(現・八日市場市内)は六名の領地に分割されている。ここには家数も記載されているが、一〇一軒中堀田家領分には五〇軒があり、石高、家数とも同家が約半数を占めている。(匝瑳郡、二〇頁)なお同書横須賀村の項には別の

記述もある。(匝瑳郡、二八二頁)このような地域では藩の布告がとくに強力でない場合に、周囲の村落に同様の習俗が存在することによる無言の強制がなく、その定着力は薄弱になろう。また藩主の交替も頻繁におこなわれ、領主にたいする帰属意識も薄かったと思われる。

淡路島や備後福山藩の答書にみられるように、現在石塔が造立されている地域にもかつては木塔で代用されていた。(梅原2、六一、七三頁)佐倉藩内においてもおそらく同様の事情にあったと思われる。通り一辺の布告として藩の意向を受けとめていた村落は、やがてその祭祀を中止したのにたいして、社日行事を村民の信仰Ⅱ社会体系のなかに統合させた集落は木塔から石塔への建替えをおこなったものと考えられる。八街町大谷流神明社境内の石塔には「寛政三年亥八月社日祭之」、「天保六未年再建之大谷流村」と、また同町馬道向山林中の石塔に「寛政三亥年八月社日登之」、「天保十五辰年二月社日立之」と刻まれている。(八街町私信)(写真

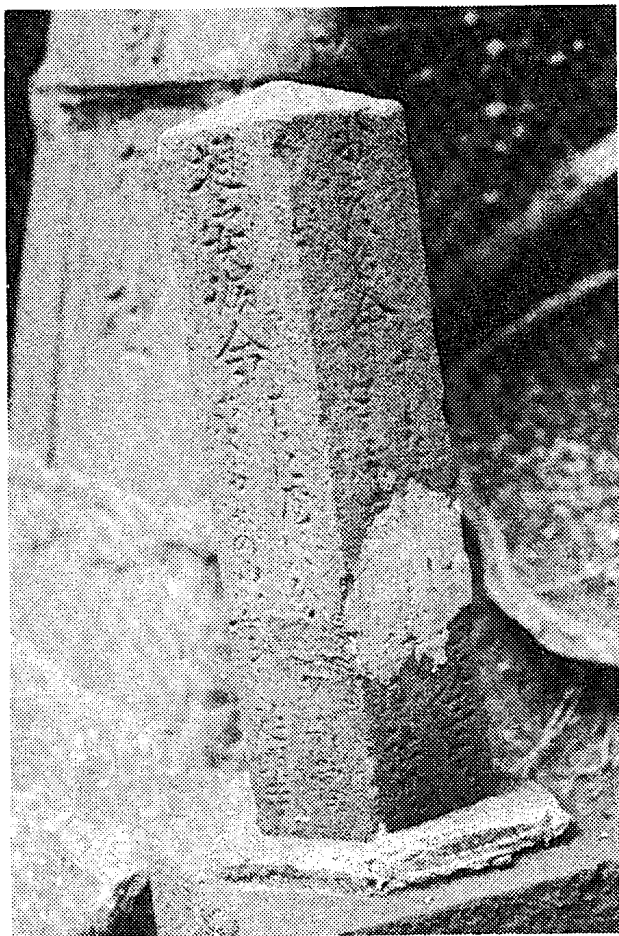


写真4 五社神社、千葉市都町諏訪神社境内(松村敬三氏撮影)

三)これは一七九一年藩の布告により社日祭をおこなうようになり、一八三五年および四四年にそれぞれ現在の石塔を造立したと考えることができよう。石柱の造立は祭祀の定着を強力に支持するものであろうが、多くの記念碑や供養塔にまぎれて、その存在すら意識されていないところもある。

さきに述べたように、後期堀田氏の采地は印旛郡内に限られておらず、千葉郡内にも及んでいた。『千葉郡誌』にはいずれも現・千葉市内に五穀神社(更

科村下田字宮ノ後鎮座の大宮白幡神社および同村大井戸字沖ノ内鎮座の白幡神社の境内社)や五社神社(都村辺田字町田通鎮座の諏訪神社の境内社)などの記述がみられる。(千葉郡、七二六〜七、七一九〜二〇頁)これらは『印旛郡誌』にみられる五穀守護五社神社(酒々井町本佐倉村字根古谷鎮座の妙見神社境内)(印旛郡、後一七五〜六頁)と似た表現であり、社日塔の存在の可能性が示唆され、諏訪神社境内には醮儀型社日塔がみられる。(松村氏私信)

匝瑳郡には椿村、横須賀村、木戸村の三カ村に堀田領があった。(印旛郡、前一三二四頁)現在八日市場市内にある椿村には堀田家領分のほか二名の知行所があり、横須賀村の状況は表一に示した。(匝瑳郡、一六、二〇頁)このような支配形態のもとでは領主の影響力は比較的薄弱であったのか、また領主にその意図がなかったのか、社日塔はみられない。(八日市場市私信)現光町内にある木戸村について『匝瑳郡誌』は堀田氏について触れていない。(匝瑳郡、二四頁)しかし、同町木戸字七割には木戸陣屋跡があり、「下総佐倉城主従四位下侍兼備中守紀朝臣堀田正篤保」と記された棟札が残されている。幕府の命により佐倉藩が東海岸警備のため造った陣屋である。(光町、四八二〜三頁)このような状況では領主は同地の領民にたいして農民としても関心は薄かったと思われる。光町内にも社日塔はみられない。(光町私信)また香取郡佐原村(現、佐原市)の天狗党騒動に佐倉藩が出動、一八六四年から佐倉藩領になった。(角川、四一八〜九頁)同地の佐倉藩支配は短期間であり、地神塔の有無は確めていない。

匝瑳郡の東側に位置する海上郡海上町内に三基の醮儀型田ノ神塔がある。(梅原²、六二〜三、七二頁、図版IV)このうち、大間手、幾世の両村は椿海干拓によって造られた一八新村に属しており、長尾村とともに、一七四六年佐倉藩の領地になったところである。(角川、九七、六〇九、七三四頁)大間手の塔には「寛政」(一七八九〜一八〇一)の文字がみられ、見広の塔には「文政十一年八月吉日」(一八二八)の紀年銘があり、(嶋田¹、二、七頁)印旛地方の造立年代とほぼ一致している。このような点から、同町内の醮儀型石塔の造立には領主堀田氏の関与が考えられる。しかし、堀田氏と直



写真5 盛土を取り去った五穀祖神塚、千葉県印旛郡八街町大関、若宮神社境内（同町教育委員会撮影）

接関係がない見広に醮儀型石塔があり、堀田氏の采地であった長尾には醮儀型石塔はなく、やはり新村である高生とともに四角屋根付石祠が祀られている。（嶋田2、七、一三頁）この間の事情は不詳であるが、長尾は新村設置後も無住村であり、旧村からの通い作がおこなわれていた。（角川、六二九頁）このような時期に社日塔が造立される契機は少なかったといえよう。同村は蛇園村を親村としていたが、同村にも田ノ神塔はみられない。見広の雷神社境内に醮儀型田ノ神塔がみられるが、強いてその要因を求めるならば、同社は長尾をも含む一三郷の産土神として崇敬護持されていた（嶋田1、二五頁）ことから、長尾に出作していた農民が醮儀型田ノ神塔造立の地として雷神社を選んだことが考えられる。海上町内には宮型石祠と醮儀型石塔のほか、清滝部落では高宮を毎年造って田ノ神を祭祀している。服部重蔵氏は藁宮を田ノ神祭祀の古い形態とし、石祠は後年それに置き換えられたものとして捉えておられるが、（服部、四七、四九頁）醮儀型石塔は堀田氏の関与がその一契機となったものと考えられる。雷神社境内の醮儀型石塔の造立に、同神社の氏子が、大間手や幾世の祭祀形態を積極的に受容したとい

うことを否定する材料もない。長尾の宮型石祠の造立をも含めて、それぞれの住民がそれぞれの状況に応じて時代に適したと判断した様式を選択して、在来の祭祀体系に統合させていった結果が海上町の現状を示しているといえよう。

領主が『醮儀』に則して祭祀をおこなうように同一のことを求めたとしても、領民はそれぞれの状況に則して受けとめ、行動をおこし地域性をつくり出している。徳島県の北方では地神塔は雲板をもつ箱石の上に立てられるが、南方では雲板はみられない。埼玉県児玉地方の社日塔はさまざまの趣向を凝らしている。印旛地方の社日塔は一般に簡素であり、竿石と台石が一個の石材から丸彫りにされたものも多い。(写真六) また、塚の上に置かれたものもみられ、木の根本に添えられたようなものもみられる。(写真一) 八街町大関、若宮神社境内の社日塔はかつては塚の上に置かれていたが現在盛土は除かれている。(押尾氏による) 周囲にみられる石材は塚の構造を知る手掛りになるかも知れない。(写真五) 海上町の大間手と幾世の田ノ神様には瑞垣が巡らされている。印旛地方の塔の垣についてはのちに触れる。

注

一 印旛地方としてとくに厳重な定義は必要としない。印旛沼の周辺地域を指しているが、とくに問題となるのは後期堀田氏時代の佐倉藩領である。本稿で取り扱う海上郡の飛地は別にし、佐倉藩領は印旛郡内に限らず千葉郡内にまで及んでいた。

『印旛郡誌』が編纂されたころの印旛郡は、現在の佐倉市、成田市、四街道市を含む印旛郡下の八町村に該当している。なお、当時の阿蘇村は現在八千代市に編入されているが、本稿の内容と直接関係する事項は見当たらない。

三、堀田氏

前項では、堀田氏が譜代の大名として将軍家のお膝元である関八州に得た采地の状況を中心に社日祭祀の定着状況を考えてきた。

関東地方の知行主は幕府の政策によって「鉢植え」的に移封、転封がおこなわれ、領主はたんに年貢の納め先にすぎな

い「非領主」的性格の存在になった。しかし、このようにななかで堀田家と佐倉藩の領民との関係は特殊なものであったといえよう。このことは表一にみることができ。一六四二年から一六六〇年までの期間が前期、一七四六年から版籍奉還までが後期堀田氏といわれている。前期と後期の系譜関係は系図に示す。さて、醮儀型地神塔が佐倉藩内に造立されたのは、いうまでもなく、『醮儀』の出版以降の事象であり、後期堀田氏の時代のことである。

日常的に移封、転封がおこなわれた関東地方において、堀田正亮が山形から佐倉に所替えになったことは、領民にとっても正亮にとっても日常的な移封以上の意味をもつものとして受けとめられたと思われる。それは前の堀田氏の時代に義人宗吾にまつわる一連の事跡があったからである。佐倉宗吾郎などと呼ばれる人物を中心とする物語がまったく架空のものかどうかはここでは問題とする必要はない。ここでは一七四五年に正亮の移封にさいしてこの事件は無視ができないこととして、宗吾が

表2 佐倉藩における大名配置の変遷

番号	大名名	在封	期間	石高
1	三浦義次	天正18~	1590~	10,000
2	武田(松平)信吉	文禄元~慶長7	1592~1602 (10)	40,000
3	松平(越後)忠輝	慶長7~"8	1602~1603 (1)	50,000
	幕領	"8~"12	1603~1607 (4)	
4	小笠原吉次	"12~"14	1607~1609 (2)	28,000
5	土井利勝	"15~寛永10	1610~1633 (23)	32,400~142,000
6	石川忠総	寛永10~"11	1633~1634 (1)	70,000
7	松平(形原)家信-康信	"12~"17	1635~1639 (4)	40,000~36,000
	幕領	"17~"19	1639~1642 (3)	
8	堀田正盛-正信	"19~万治3	1642~1660 (18)	110,000
	幕領	万治3~寛永元	1660~1661 (1)	
9	松平(大給)乗久	寛文元~延宝6	1661~1678 (17)	60,000
10	大久保忠朝	延宝6~貞享3	1678~1686 (8)	83,000~93,000
11	戸田忠昌-忠真	貞享3~元禄14	1686~1701 (15)	61,000~67,000
12	稲葉正往-正知	元禄14~享保8	1701~1723 (22)	102,000
13	松平(大給)乗邑-乗佑	享保8~延享3	1723~1746 (23)	60,000
14	堀田正亮-正倫	延享3~明治2	1746~1869 (123)	100,000~110,000

(小笠原, 他, 156頁)

原表に西暦紀年を付した。()内は単に期間の終りの紀年と開始の紀年との差を示すものである。

民衆の心の中に生きていたことが重要なことである。その事件、つまり『佐倉義民伝』の物語りは『地藏堂通夜物語』や『堀田騒動記』また『東山桜荘子』などの形となって一般に知られているが、現在、成田市宗吾、宗吾霊堂の宗吾御一代記念館でおこなわれている説明にしたがえば、おおよそ次のようなものである。(長田)

一六一三年、現在の成田市内の公津村で生まれた木内惣五郎は、一六四四年の凶作にさいして、割元名主として功をあげ、領主堀田正盛から苗字帯刀を許された。翌四五年農民が将門山に籠り一揆を企てたとき、惣五郎は救済方を藩庁に願い出て入牢した。一六五一年の正盛の死後嫡子正信が相続したが、領内は重税にあえぐ。翌五二年、不作、農民の惨状は目を覆うものがあり、九月、三八九カ村の人々が公津村の鎮守に集まり藩を指す。惣五郎は慰撫したが、藩は増税断行の態度をかえなかった。三〇五カ村の名主は江戸の堀田家下屋敷に嘆願書を差出したが却下された。さらに惣五郎ら六名の名主総代が残り久世大和守の駕籠先に訴えたが無効であった。身辺整理のため一旦帰郷、(ここに甚兵衛渡しの搜話がある)上野東叡山凌雲院の僧の手引きで東照宮参詣の將軍家綱の行列に訴状を差し出した。惣五郎の身柄は堀田家に移された。一九五三年惣五郎を除く五名の名主総代は佐倉領十里四方追放閑所、惣五郎は磔、その四名の子女は子孫を根絶するため直訴に加担したということで打首にされた。そのさい三名の娘は男子として処刑された。

しかし、訴状は評議に付され、速刻減税が藩に命じられた。さらに一六五八年九年と農税が免除され、一六六〇年には幕府の諸税運用上の軽減がおこなわれ、惣五郎の一念は達せられた。堀田家歴代の主は毎年八月三日惣五郎の命日には祭典をおこない、一七五二年の百回忌に「涼風道閑居士」の法号を贈り、さらに一七九一年には「徳満院」の三字を加えその冥福を祈った。また、一六〇六年には田高五石を子孫のものに与えた。

これが現在の『実説』の摘要であるが、前堀田氏入国以来、二代十数年におよぶ搾取誅求に堪えかねた農民のために刑

についた宗吾夫婦は子の殺されるのをみて「自分たちは万民のために死ぬので悔やむことはないが、東西も知らない幼児まで殺すのは非道のいたりである。やがて上野介（正信）を修羅道へ引きいれて思いしらせよう」と叫んだ。その後、上野介の妻の懐胎中に変異がおこり、ついに病死する。上野介はその後宗吾の霊を弔らうが、自分も乱心して城地を没収され、ようやくその子に名跡の相続が許された。（見玉、五～六頁）正信は譜代意識が強く、幕府の要求する軍役を忠実に負担するために家臣団の増強と軍備の充実につとめるため、財政強化をはかり、租税増徴をまねき、農民の窮乏を進めたと思われる。このような背景があったればこそ、一六六一年二月には幕府代官による高に対する貢租の二分引き下げという異例の公表がおこなわれた。つまり、当時の佐倉藩には惣五郎のような義民が出現する切実な背景が存在したと考えられている。（小笠原、他、一八六頁）ということは、宗吾の物語りには多くの農民が共感し、そのなかでその物語りは成長していったと考えられる。領主は宗吾等を処刑した翌年、一六五四年、内郷村大佐倉区字将門（現・佐倉市内）に口之宮大明神を創立、石の鳥居を寄進している。その後正信は発狂ということに改易になり、かろうじて家断絶だけはまぬかれた。これが宗吾の霊をまつたものである確証はないようであるが、一七〇一年から二三年まで佐倉藩主であった稲葉家の儒臣磯部昌言編著の『総葉概録』（一七二五年序）と『佐倉風土記』（一七二二年成稿）ではその説を否定している。昌言に『総葉概録』等の編修を命じた正往は正信の再従兄弟の關係にあり、堀田氏の失政については筆を避けようとしたとの考えがあったのではないかと指摘されている。（見玉、一三三～五頁）同じく、稲葉正往、正知父子に仕えた渡辺善右衛門守由（字子邦）（一七〇一年～六二年）は一七〇二年から二二年までと一七年から二三年まで、その幼年青年期計一五年を佐倉で過ごし、その間の見聞を『古今佐倉真佐子』（一七五三年以前の著と推定）に記している。（佐倉市、一～三頁）そこにはつぎの記載がある。（佐倉市、七四頁）

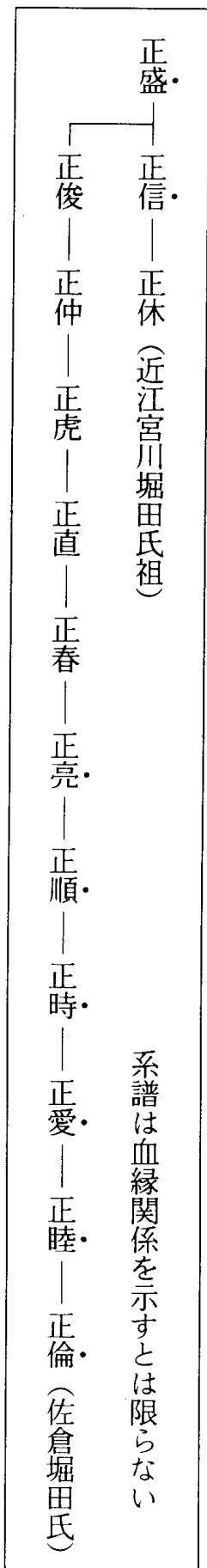
……人行といつかたへか隠れ一人もをらず。平親王の社也。此少先に又石の鳥井ある。はいでん宮も右の趣にてか

わる事なし。そうず大明神（ミカミ）の社也。此宮は堀田上野介殿こんりう。百姓そうず（惣五）二云者ありしか城主の上野介殿とくし（公事）を仕。そうずかちくす成るを非になし、をもき仕置せしゆへ、此靈魂たゞりをなしし故神にまつり宮を建る。それよりしづかにしてたゞりなし。此靈ゆへ上野殿つぶるゝ也。……

気兼ねなく叙述した私記の『佐倉真佐子』のほうが、当時の状況をより忠実に示しているという見方もありえよう。とにかく、惣五郎の事件は物語りとして脚色され民衆の宗吾にたいする、そしてまた堀田氏にたいする見方も固定化されていったと想像される。宗吾は神格化され、堀田氏は忌まわしい大名と目されたのであろう。後堀田氏はそのような時期、一七四六年、惣五郎の死後やく百年を経過した時に藩主として佐倉に君臨することとなった。後堀田氏は前堀田氏の分家筋である。堀田家と領民の間に異常な緊張が生じることが想像される。正亮が初めて新領地に入部したときに、惣五郎の亡霊に会ったことが記録されている。（児玉、一五七〜八頁）そして翌年、惣五郎の宮を再建し、その後も明治にいたるまで崇敬を続けている。後堀田家の家記『天保校訂紀氏雜録』は口の明神を、正信が宗吾のために建てた祠であるとの認識のもとに記述をしている。（児玉、一六一頁）正信の真意は不明であるにせよ、すくなくとも前堀田氏は私に祀ったものを後堀田氏は公然と宗吾の霊を祀ったのである。（児玉、一七〇頁）一七五一年、惣五の百回忌供養の時宗吾道閑居士と諡し、

堀田氏系図（・印 佐倉藩主）

（大野、三二頁、児玉、一一二頁）



公津村の惣五郎の塚へも石塔を下賜、一七九一年、百四十回忌に当っては正順は院号を贈り徳満院涼風道閑居士とし、公津村の東勝寺の墓前に石塔を建てた。正時代の代一八〇六年には惣五郎の子孫に高五石余の田地を与えた。(児玉、一七三〇四頁)

一方民衆の意識であるが、宗吾の霊は神格化されていた。千葉郡下ではつぎの手鞠唄が俗謡として採集されている。(千葉郡、八九一頁)

一ばんはじめのうつのみや、にしまたにつこうちゆうぜんじ、三またさくらの宗五郎、四はまた信濃の善光寺、五つはいづもの大やしる、六つはむらく鎮守様、七つは成田の不動様、八つは八幡の八幡宮、九つこうやの弘法様、

十で東京小学生。

治 達 原 梅

いうまでもなく、時代も異なり、子供のたんなる語呂合わせの唄であり、全体の趣旨を把握してはいないが、佐倉の宗吾郎が民衆の崇敬を集めた寺社の一つと意識されている社会でのものと受けとめてよいと思われる。ここで注意したいのは、惣五郎の遺徳は、農民間で世直し様としてたたえられていたことを指摘するとともに、口の宮神社を世直しの神として紹介し、かつて自分達の祖先を救ってくれた惣五様は、自分達の苦しみを救い、かつ守ってくれると信じていたとの記載である。(大野、二五〇六頁)そして、後堀田氏の入封後の状況もそのような要求を農民が抱いていた時代である。一七五〇年、成田村の民衆八〇九名が貢租のことで城下に押しかけてきた。やがてその首領は投獄され鎮定されたが、この事件を契機として幕府は強訴禁止令を発した。翌五一年正亮は社倉法を設けて窮民救済を計り、その翌年、惣五郎を祀っている。さらに、五四年と五七年には領民から賄賂を取った郡吏を追放したり謹慎させたりしている。そしてこのことは偶発的な事件ではなく、一方では農民を抑え、一方ではこれを懐柔し、あるいは家臣の収斂を防ぐことを意図したものはなかるうかとの説が提出されている。すなわち、後堀田氏の惣五郎にたいする取扱いは、ただ一個の無実の者の霊を慰



写真6 五社神社, 千葉県印旛郡本埜村
中根、鳥見神社境内 (同村教育委
員会撮影)

で一揆がおこっている。(児玉、他、二二六頁)そして、九一年、惣五郎の百四十回忌にあたり、崇敬の意をあらわしたことは前に触れた。藩が社日の祭祀を営むように付達したのはこの頃と思われる。いくつかの塔の紀年銘はそれを物語っている。(年表参照)藩がこのことを宗吾の慰霊と結びつけて祭らせた証拠はない。しかし、民衆の側でどのように解釈することができいくつかの要素がみられる。佐倉市志津村下志津区字大口の五社神社の創立は一七五二年であるが、(印旛郡、前―四七八頁)その年は宗吾の百年忌がおこなわれた年であり、この年から村民によって宗吾が祀られていたのではあるまいか。さらに、社日が口の明神社の祭典をおこなう時と近いということもある。社日は彼岸の中日に近い日である。ここの祭祀も春秋二仲二月三日八月三日とこれに近い。また口ノ宮大明神は神鏡五個を御霊とし、父子五人を慰霊とし、父子五人を慰籍したとの考えもある。(印旛郡、前―五九九―六〇一頁)

めるというのではなく、惣五郎の祟の思想の背景にある民衆の意識にたいする対処である。惣五郎の祟が全く一個人の憤りに出たものとすれば当事者にとってのみ恐るべきことにすぎないが、惣五郎の祟というものが堀田氏改易の原因となったと考える裏には、その祟が広く民衆の共感を呼ぶものであったと推量されている。(児玉、一六八―七一頁)惣五郎の叫びの背後には民衆の叫びがあり、その要求はすなわち世直しであった。そして、その要求は消解されていなかった。一七八三年と一七八七年に佐倉藩

また、公津村下方の宗吾供養堂、現在の成田市宗吾の宗吾霊堂は宗吾父子五人の霊像を安置したところであり、同境内の五霊堂は宗吾とともに力し罪科を得、一六五三年領地外に追放された五名の名主の霊魂を慰めるために一八三〇年に建立されている。(一九一〇年焼失)(印旛郡、後一三五五頁) 和田村下勝田字神台鎮座の天満神社の境内社世直神社については「当時重右衛門亡魂を以て世直し神とす正保年(一六四四、四八) 佐倉宗吾に組し宗吾処置の際断罪に処せられ近年亡霊村方へ祟をなし故に亡魂を尊ひて世直の神と称し伝わり建物間口三尺奥行四尺」との記述がある。(印旛郡、後一二〇頁) そしてこれを祀るおもてむきの理由は「五穀豊穰国家安全」とまさに社日塔を祀る趣旨と同一である。(印旛郡、後一一八頁) 本埜村中根、鳥見神社境内の社日塔が現在世直し様と呼ばれている。下勝田の世直神社が何時建立されたかという点とともに世直しの呼び名がいつから使われるようになったか、興味のある問題であるが、現在は不詳である。

宗吾について引用する場合、原文にしたがった。しかし、その他の個所では実存したであろう人物を述べるときは惣五郎、民衆の崇敬の対象としてみる場合は宗吾と記すことにした。

梅原達治

注

一、当時の佐倉領民として、『地蔵堂通夜物語』はつぎのように記している。(植木、一〇四、五)

法田上野介知行所下総国印旛郡佐倉領

八拾四ヶ村名主百姓共

同国千葉郡千葉組合七拾四ヶ村名主百姓共

同国相馬郡布川守谷組三拾九ヶ村名主百姓共

上総国武射郡東金組合七拾ヶ村名主百姓共

また『百姓訴訟物語』はつぎのように記している。(植木、一〇八頁)

下総国印旛郡九十七ヶ村

名主百姓共

同国千葉郡八十九ヶ村

名主百姓共

同国相馬郡布川守屋組八十四ヶ村

名主百姓共

同国埜生郡九十ヶ村

名主百姓共

上総国武射郡九ヶ村

名主百姓共

同国山部郡東金町組合二十ヶ村

名主百姓共

二、この編者はこのことを里民の誤伝としている。(佐倉市、一一五頁)

三、重右衛門の諡は平等厚礼居士である。(印旛郡、後一一八頁) 幕末の「世直し」に「平均」の考えがその論理であった(佐々木、一四頁) こととあわせて考えると興味もたれる。

考 察

本稿は前稿で提起した文化要素の伝播や定着に関する類型を印旛地方を例としてとりあげてはめたものである。阿淡地方と比較するとその分布の稀薄さが、また奥武蔵野の児玉地方と比較するとその構造の簡略化などが目立つ。分布の密度についてはすでに触れた。構造についても興味あることではあるが、これ以上論及する材料はほとんどもちあわせていない。

阿淡地方にみられた新しい信仰体系——このこと自体、新しい文化要素である——の導入の状況を一般化した様式が該当するであろう場合として前稿で埼玉県児玉郡児玉町を中心とした地域の社日塔をとりあげた。本稿では印旛地方、より正確には後堀田氏佐倉藩の村落ではその様式があてはめられることが部分的に証明されているものとして当該地域をとりあげたものである。

まったく無知な状態で印旛地方を眺めた場合、同地方から受けた衝激は強かった。佐倉藩の領民にとって、堀田氏や宗吾のもつ意味は大きかったと思われた。それぞれの地方を理解するときに、それぞれの地方独自の状況を問題にすることは常道であ



写真7 佐倉市上代、熊野神社境内、五穀成就社



写真8 四街道市和良比, 皇産霊神社境内, 社日宮

るが、宗吾の事件を社日祭祀と結びつけることにためらいはあった。あまりにも一般的な法則の適用に、それに影響を与えるではあるうがきわめて特殊な面にのみ着目しそれを取りあげることが平衡を欠くものではあるう。そのようなことは印旛地方で操り広げられた、政治、経済、そのほかさまざまの社会事象の実態のきまこまかい把握によって、より明確に農民の社日祭祀の受容や定着などの機構や経緯をより正確に知ることができると思われる。宗吾のことはそのような視点から一つの手掛りとして取上げたものである。

宗吾と社日祭祀とを結びつけて考えるようになった契機は本埜村中根の鳥見神社境内の五社神社が世直し様(ニ)と呼ばれていることにあつたが、その心象を強めるものはほかにもあつた。それは佐倉市上代の村社熊野神社境内の五穀成就社の状況である。同社では春秋の社日には五穀成就祭が就行され、その社祠は南面する醮儀型社日塔であるが竹矢来で囲まれている。『印旛郡誌』は「倉稲魂命を祭る、……建物間口六尺奥行六尺」と記している。(印旛郡、後一一二頁)ここで建物は矢来のことを指し、祭神は北面する神号を指すものであろうか。



写真9 五社大明神, 佐倉市山崎

さて、現在、日常生活においては一般に用いられていない竹矢来がここで用いられているのは、崇敬者が竹矢来に特殊な意味を与えているからであろう。従来、一般には垣として境界を表示するものとして用いられたものであるが、ある時期に聖地を俗界と区別するという特殊な機能を果すようになったと考えられる。同じ千葉県内船橋市三山の二宮神社の「三山まつり」では、本社、畑、馬加、武石の各神社の四基の神輿の御旅所の斎場の四ヶ所の土壇の周囲は竹矢来で仕切られている。(松田、三〇四頁)しかし、また、一六五三年旧八月二日、宗吾父子五名を処刑した公津ヶ原刑場は竹矢来で囲まれていたと考えられている。(長田、一二頁、写真)上代の五穀成就社の竹矢来もそのような連想による象徴性が込められているという思いを払拭することはできない。

もう一点言及したい点がある。それは『醜儀』そのものの流通機構である。この種の書籍はおもに学者や宗教家の世界で読まれるものとして考えてきたが、この場合、大名の交際において『醜儀』に関する認識が伝えられたことも考慮する必要があるかもしれない。堀田正信は一六六〇年の改易後、七七年から蜂須賀家に預けられ、八〇年將軍家綱の死を知り蜂須賀領内で自害している。このようなことから、堀田氏と蜂須賀家とは特殊な関係が成立していたかも知れない。成田市宗吾の宗吾霊堂境内に一八九二年の「木内宗吾外五氏碑」があり、篆額は蜂須賀茂韻による。この撰文は星享により、両者はそれぞれ、貴族院および衆議院の議長

である。碑文にも「昔以義民見称今為民権家泰斗」と述べていることから、民意の代表者として両院の議長を選んだことも考えられるが、さきに触れたことも要因の一部を占めていたことも考えられる。

なお、印旛地方にも四街道市和良比の皇産靈神社などに少数であるが醮儀型ではない社日塔がみられる。これは一八七七年塔で、堀田家の布告から相当の年数が経過しており、布告の直接の衝撃は消え、農民独自の解釈によって造立したものと考えられる。

注

一 「世直石尊と云ひ、賽者頗る多し」と紹介されている（千葉県、上―五三―頁）現印旛町内の永治村高西新田字石浦の阿夫利神社については、神社略誌に『印旛郡誌』の記事をほぼそのまま転載した。ここは一八八四年、夏期には薬湯をもうけてからはとくに多くの信徒が集るようになったようである。（印旛郡、後―五四―三頁）成田町土屋村字山ノ崎鎮座の無格社八幡神社境内の阿夫利神を祭る石尊神社（印旛郡、後―九〇―六頁）などはこの神社との関係が考えられるが、埜原村小林字徒越（本埜町）の世直命を祭る世直神社（社号は『本埜村誌』による）。またこれによればその建立は一八六四年（文久四年）十二月である。（本埜村、二六―五頁）

『千葉郡誌』は「十七が春の初めに鍬鎌かついで農業に出るよ、これ島田何処へと聞かれて、私は百姓の福娘世も直る豊年

万作とり、五穀の数知れぬ皆百姓出ておいで、お拝まへ万年彌勒とまもりつく」という「世直」という唄を収録している。（千葉郡、九〇―三頁）この地方の「世直し」という言葉の内包するものを把握するにはいたっていない。

二 皇産靈神を祭神とする皇産靈神社は香取郡山田町山倉の山倉大神の分霊を勧請したことに始まる裸祭りが有名である。山倉大神はかつて大六天神と称し、皇産靈神社も一般には和良比の大六天と呼ばれ疫病をなおす神として信仰されている。（高橋、一一―二―三頁）

なお、同地方にも大六天信仰はひろくみられ、現四街道市内旭村吉岡区長堀の池は、一八七七年に大六天の奇霊があったとして参詣者が絶えず、東京付近や東葛飾郡浦安村の漁民の渴仰の深いものであり、大六天清水と呼ばれていた。（印旛郡、前―四〇―七頁）（後記参照）

後記

前稿で『新編相模国風土記稿』巻五七、愛甲郡川入村の条（現・厚木市）の五穀明神社の祭神が面定尊、惶根尊であることに触れた。（梅原³、一〇八頁）この天神第六代の夫婦神があてられるものは一般に第六天と呼ばれるものであり、その分布は中部から関東にかけて多い。（松田、五五〇頁）鎌倉市腰越の小動神社境内に童子形の小像がある。（田畑、一〇〇～一頁）また、群馬県邑楽郡大泉町の「社日祭惡神除万民守護之尊像」の神軸にも両神の名がみられる。（梅原³、一一〇、一一二頁）

本稿を草するにあたり、千葉県内はじめ各地に照会をし、御親切な御教示を得た。とくに、千葉市教育委員会文化課、中川仁一主事、成田市教育委員会文化係、大木英行氏、八日市場市教育委員会、四街道市教育委員会社会教育課、板垣晶三課長および渋谷芳則主事、印旛郡八街町教育委員会社会教育課史編さん室、同郡富里町教育委員会社会教育課、四宮浩利氏、同郡印旛村教育委員会村史係、同郡本埜村教育委員会、海上郡海上町、海上町史編さん室、馬淵一弘主任および同町教育委員会嶋田正夫係長、匝瑳郡光町教育委員会小川利昭氏にはお世話になった。

また千葉市の松村敬三氏、佐倉市の山田喜衛氏および齊藤忠男氏、八日市場市の吉澤政雄氏から貴重な御教示を得た。また、印旛郡酒々井町の押尾忠氏からは終始変らぬ物心両面の援助を賜わった。徳島県那賀郡羽ノ浦町の吉見哲夫氏からも貴重な御教示を得ている。

その他学内外の多くの方々からも貴重な御教示を賜わっている。深く謝意を表するものである。

最後に、佐倉市の社日信仰の研究に先鞭をつけられた故篠丸頼彦氏の業績にたいして深く敬意を表するとともに、それらの事業が捻り多い成果として公刊されることを心から期待するものである。

梅原達治

年表

年次	干支	西曆	佐倉城主	事項	神社創建・碑建立など
寛永一九	壬午	一六四二	堀田 正盛	正盛、信州松本より移封。	
慶安 四	辛卯	一六五一	正信	將軍家光死。正盛殉死。	
承応 二	癸巳	一六五三		惣五郎の死。子四人死。	
万治 三	甲午	一六五四		正信、將門山に石の鳥居を立つ。	
延宝 五	丁巳	一六六〇	松平 乗久	正信改易。	
延享 八	庚申	一六七七	大久保忠朝	正信、蜂須賀家に預けられる。	
延享 三	丙寅	一六八〇	堀田 正亮	將軍家綱死。正信自害	
寛延 三	庚午	一七四六		正亮、出羽山形より移封。	
宝曆 一	辛未	一七五〇		成田村民強訴。幕府強訴の禁令。	
天明 二	乙酉	一七五二		正亮、社倉法を行う。	
天明 一	辛丑	一七五二		正亮、口の明神遷宮、惣五郎に涼風道床居士と諡す(百年忌)。	
寛政 一	己酉	一七八一		『神仙靈章春秋社日醮儀』(序)。	
寛政 三	辛亥	一七八九	正順	正順、惣五郎に徳満院の号を贈る。口の明神に碑を建つ。	
享和 二	己未	一七九九		堀田氏、百五十回忌の法会を行う。	
享和 二	壬戌	一八〇二			

(児玉、一九六〇七頁など)

昭和九	明治三	文久一	安政六	文久一	天保六	文政一	文政二	文化一	文化三
甲戌	丁卯	辛酉	己未	甲辰	己未	戊子	乙亥	甲子	癸亥
一八三四	一八六七	一八六一	一八五九	一八四四	一八三五	一八二八	一八一五	一八〇四	一八〇三
佐倉藩		正倫		正睦		正愛		正時	
佐倉藩、口の明神に惣五郎を祀ることをとどむ。		正時、惣五郎の子孫に田を与う。							
								④四街道市上野。 文化年間、本埜村中根、五社神社、印旛村平賀、五社神社創立。 志津村上志津石尊大神創立（佐倉）。 ④海上町長尾、見広の田ノ神。 ④八街町大谷流A。 ④八街町馬道向B。 ④佐倉市山崎。 本埜村小林、世直神社創建。 ④四街道市和良比。 ④四街道市鹿渡。	

神社略誌 左に従って記載

た

社号（旧社格も含む）掲載ページ

- i 鎮座地〔現在の市町村名〕
 - 『千葉県千葉郡誌』前篇
- ii 祭神
 - 1 五穀神社 七一六頁
- iii 由緒
- iv 祭祀の状況
- v 社殿間数、境内坪数
 - vi (三八戸)
- vi 氏子境内社などの場合、本社の氏子数を（ ）で示し
 - i 更科村大井戸字沖ノ内 大宮神社境内〔千葉市〕
 - 2 五穀神社 七一七頁

梅原達治

iv (三六戸)

3 五社神社

i 都村辺田字町田通 諏訪神社境内 七一九〜二〇頁

4 無格社、五穀祖神 三五六頁

i 川上村小谷流区字馬道向 (八街町)

ii 不詳

iii 不詳

v ナシ 一二坪

vi 二〇戸

5 五社神社 四七八頁

i 志津村下志津区字大口 村社春日神社境内 (佐倉市)

ii 大己貴命 小彦名命 大日靈命 稻蒼魂命 埴安姫命

iii 宝曆二年九月創立 (一七五二)

iv 年々春秋社日に祭典

v 建物間口二尺五寸奥行三尺五寸

vi (百七戸)

6 無格社 稻荷神社 五〇六〜七頁

i 阿蘇村米本区大山 (八千代市)

ii 稻蒼魂命 太田命 保食命 大己貴命 大宮姫命

iii 寛政十一年 (一七九九) 城州紀伊郡稻荷本宮祠官正四位下行

佐渡秦親益正一位稻荷大明神安置候

v 社殿間口六尺奥行六戸拜殿間口三間奥行二間半 境内七十八

坪

『千葉県印旛郡誌』後篇

7 五社神社 四八頁

i 佐倉町海隣寺町鍛冶作 村社愛宕神社境内 (佐倉市)

ii 大日賣産知命 譽田別命 武甕槌命 香我脊雄命 泰ノ宇豆

麻佐

iii 由緒不詳

v 建物間口三間奥行三間半

8 無格社 五穀守護五神社 四九頁

i 佐倉町大蛇町字堂ノ下 (佐倉市)

ii* 天照大神 大己貴命 少彦名命 埴安姫命 蒼稻魂命

iii 佐倉町大蛇村字麻賀多脇 村社麻賀多神社に明治四二年 (一

九〇九) 五月七日合祀

vi (三〇戸)

* 五柱の祭神は麻賀多神社の一一柱の祭神より推定抽出し

たもの

9 世直神社 一二〇頁

i 和田村下勝田字神台 村社天満神社境内 (佐倉市)

ii 世直し神 (重右衛門亡魂)

iii 正保年 (一六四四〜四八) 佐倉宗吾に組し宗吾処置の際断罪

に処せられ近年亡霊村方へ祟をなし故に亡魂を尊ひて世直の神

と称し伝なり

v 建物間口二尺奥行四尺

vi (四二戸)

千葉県印旛地方の社日信仰

- 10 五穀成就社 一一二頁
- i 和田村長熊村字作尻 無格社浅間神社境内〔佐倉市〕
- ii 事代主命
- iii 由緒不詳
- v 石祠
- vi (一七戸)
- 11 五穀成就社 一二二頁
- i 和田村上代村字権現谷 村社熊野神社境内〔佐倉市〕
- ii 倉稻魂命
- iii 由緒不詳
- v 建物間口六尺奥行六尺
- vi (一四戸)
- 12 五社稻荷 一七四頁
- i 酒々井町今倉新田村字宮ノ下 村社松島神社境内〔酒々井町〕
- ii 埴安姫命 天照皇大神 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命
- iii 由緒不詳
- v 建物は石宮なり
- vi (一三戸)
- 13 五穀守護五社神社 一七五―一六頁
- i 酒々井町本佐倉村字根古谷 村社妙見神神境内社〔酒々井町〕
- ii 天照大神 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命 埴安媛命
- iii・iv 旧領主堀田大蔵太夫殿より五穀為成就村民にて年々春秋両度祭典可致旨仰出候に付寛政十一年未年〔一七九九〕二月新築し未だ村中にて年々春秋社日祭典仕候
- v 建物石三寸五角
- vi (一二戸)
- 14 五社神社 一七八頁
- i 酒々井町柏木村字宮下 無格社七社神社境内〔酒々井町〕
- ii 天照皇大神 埴安姫命 蒼稻魂命 少彦名命 大己貴命
- v 建物は石祠なり
- vi (二四戸)
- 15 天照皇太神 二六九頁
- i 富里村久能字比丘尼内 村社駒形神社境内〔富里町〕
- ii 大日靈女貴命 埴山姫命 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命
- iii 不詳
- v 建物は石祠にして高二尺一寸横五寸
- vi (三九戸)
- 16 世直神社 三四〇頁
- i 公津村船形村字手黒 村社麻賀多神社境内〔成田市〕
- ii 稻倉魂命
- iii 不詳
- v 建物は石祠にして縦八寸高二尺横一尺
- vi (二五〇戸)
- 17 無格社五社神 三四二頁

- i 公津村台方村字武蔵〔成田市〕
- ii 天照太神 少彦名命 大己貴命 倉稻魂命 埴安媛命
- iii・iv 創立年月不詳と雖五穀豊饒の為旧領主に於て施行せし春秋両度社日を以て于今祭典を施行す
- v 社殿は石宮にして五方面三寸境内十六坪あり
- vi 八〇戸
- 18 無格社五社神 三四三頁
- i 公津村下方村字南根子屋〔成田市〕
- ii 天照太神 少彦名命 大己貴命 倉稻魂命 埴安媛命
- iii・iv 創立不詳、五穀豊饒の為旧領主に於て施行せし春秋両度社日を以て今祭典を施行す
- v 社殿は五方面三寸の石宮、境内七〇坪
- vi 七五戸
- 19 無格社五社神 三四三頁
- i 公津村大袋村字椎塚田〔成田市〕
- ii 天照太神 少彦名命 大己貴命 倉稻魂命 埴安媛命
- iii・iv 創立不詳と雖五穀豊饒の為旧領主に於て施行せられし春秋両度社日を以て于今祭典を執行す
- v 社殿は五方面三寸の石宮にして境内一七〇坪
- vi 二五戸
- 20 無格社五社神 三四三〜四頁
- i 公津村江弁須村字珍重〔成田市〕
- ii 天照太神 少彦名命 大己貴命 倉稻魂命 埴安媛命
- iii・iv 創立年月日不詳と雖五穀豊饒の為旧領主に於て施行せられし春秋両度社日を以て于今祭典を執行す
- v 社殿は石宮にして五方面三寸なり境内四坪
- vi 二〇戸
- 21 五社神社 三八九頁
- i 六合村平賀村字宮前 村社宗像神社境内〔印旛村〕
- ii 大日靈貴命 埴安媛命 大己貴命 少彦名命 倉稻魂命
- iii・iv 文化年中（一八〇四〜一八）旧領主堀田殿より御達に付社日を祭五穀成就仕来候
- v 建物は石祠
- vi 二二五戸
- 22 村社阿夫利神社 五四二〜三頁
- i 永治村高西新田字石尊〔印西町〕
- ii 石凝留命 石裂命 日本武命 根裂命
- iii・iv 明和元甲申年（一七六四）全国海上郡銚子海底より青石二個取上しに其石往々奇怪のことあり因て其土地に於て人民之を崇敬する者多し已後祈願も其乞に應じ利益少からず或日人民共に之に称呼を下し名づけて世直し石尊と云ふ（其意に曰く惡風を直し正に帰せしむるが故なり）人民或は其里に移し鎮守となさんとするものあり或は相模の国石尊社へ奉納なさんとするものあり卒に論議囂々然れ共終に奉納するの議に決し因て俄に神輿を作り其内に蔵し発程方角を抽籤に占して各駅村を巡行し將に薦社し奉納なさんと今年十二月中近隣誉田村及清戸村へ着

- し夫より浦部村鳥見社に着し爰に暫時安置し程なく近隣同国相馬郡布佐駅へ遷送せんとせしに豈凶らんや時已に月迫の故か全駅に於ては更に受けず引返し猶亦婦村の上全村へ安置せし処其夜村吏のもの夢みらく青衣の老人二名来り曰く我等を高西新田鎮守両社の内へ合祭せよと云ひ棄て行方知れぬ消失せしにより村吏驚て其夜の明くるを俟ち同新田兼帯浦部白幡両村一同集議して神意に任せ全二年（一七六五）六月廿七日右両社境内に突兀たる凸地の頂に奉納なし因て年々歳々同日を以て祭る
- v 社殿間口五尺奥行六尺拝殿間口七間奥行三間御饌所間口四間奥行三間、境内一一五〇坪
- vi 五九一戸 人員 一五〇〇〇人
- 23 五社神社 六一九頁
- i 本郷村中根村宮馬場 村社鳥見神社境内〔本埜村〕
- ii 大日靈命 埴安姫命 大己貴命 少彦命 稻倉魂命
- iii・iv 文化年間（一八〇四〜一八）旧領主堀田殿より御達に付社日祭為五穀成就仕来候
- v 建物は石祠にして六角の四寸角なり
- vi (三九戸)
- 24 世直社ヌナ社 六四一頁
- i 埜原村小林字徒越 村社水神社境内〔本埜村〕
- ii 世直命
- iii 不詳
- v 間口二尺 奥行二尺
- vi (三〇戸)
- 25 五社宮 七〇四頁
- i 安食町矢口村字花輪 村社一ノ宮神社 境内〔栄町〕
- ii 天照皇太神 大己貴命 御魂命 大宮姫命 太田命
- v 建物間口二間三尺奥行一間
- vi (八五戸)
- 26 村社五社神社 七五三頁
- i 豊住村佐野村表谷津〔成田市〕
- ii 天照皇太神 大己貴之命 大田之命 大宮之姫命 蒼稻魂命
- iii 創立不詳 一九〇九年三月五日佐野字六ツ谷津にありし無格社神明神社を合祀す
- v 社殿間口三尺奥行五尺境内一六坪
- vi 一二戸
- 27 無格社五社神社 九五六頁
- i 遠山村東和田村字鳥居下〔成田市〕
- ii 天照大神 埴安姫命 倉稻魂命 少彦名命 大己貴命
- iii 由緒不詳
- v 社殿間口四寸奥行四寸の石造祠、境内三百九〇坪 境内四社あり
- vi 五二戸
- 28 村社 八坂神社 六八頁
- 『千葉県君津郡誌』
- i 平岡村三箇字城の越〔袖ガ浦町〕

ii 素盞鳴尊

iii 創建年月不詳、一五一七年再建、尾張国愛知郡津嶋神社より御霊を移す。旧神号と称したが明治初八坂神社と改む。

vi 例祭 九月一日

v 社地 三六〇坪

29 村社 御霊神社 六八頁

i 平岡村三箇字御霊原

ii 大日靈貴尊

iii 創建年月不詳

iv 九月一日祭典

v 境内 五五二坪、未社 二社

* 何らかの事由によって五つの神社を統一して一社としたり、一社の祭神が五座である場合五社神社とか五所神社と称されることが多い。(佐野、一四二頁)『醮儀』によらないと思われるものも一応掲載した。

資料

一、口明神祠之碑(一七九一年)

(印旛郡、後、三二四〜五頁)

治 達 原 梅

鬼神之為靈其昭明乎弗見其形弗聞其声而敬之也如在弗敬則否矣亦猶火之性寄於木也待人鑽燧以著其妙用歟吾藩佐倉者久野

氏之墟也距城東一里許有將門山蓋承平古墨云昔日在千葉氏守斯邦也肇造將門神祠暨妙見堂歲月悠遠並就頽廢寬永中泰祖玄

性公加賀守正盛移封佐倉經營之迨乎泰祖薨忠三上野介正信襲封私有志願崇夫巳氏惣之靈建祠于將門山而祀之寔承応三年冬十一月也

士庶進香崇敬甚篤称曰口明神焉爾後有故国除天和年間攸靜公豊前守正休正信之庶子新受封毛之吉井尋江之宮川代三公侯于佐倉者凡四姓

松平、大久保皆以民之心為心祠宇荒壞則随修葺焉延享乙丑先公相模守正亮拜相越明年從羽之山形移封于此則私喜以謂佐倉者泰祖旧

封至忠三公雖被国除高祖不矜公左少將正俊伯爵正倫之祖寔為其弟以吾華勞之胄再有斯土江之封邑亦綿々則忠三公之靈豈弗伸眉於天乎哉

善繼人之志周公之所以称達孝也吾雖非類尚繼忠三公之志矣宝曆壬申之秋乃命有司改作口神祠事詳于別志先是宝珠院僧世司

其祀因給以既稟□後定春秋二仲二月三日為賽会期祭典使有司齋明盛服臨以祭之爾来春秋礼典亡闕寡人以眇々承襲先基励精

就務夙夜匪懈猶恐其所以育民人保社稷者或有遺漏而貽羞乎祖宗也是以弗敢侮鬼神凡封内神祠載在祠典者大小莫不畢举矣就

中口明神者忠三公勗焉先生繼焉士庶崇敬神靈昭著則不得殊奉承焉同院僧某者請立碑記事垂諸不朽乃略陳其由来由若茲亦唯以民之心為心春秋祭礼永无廢典而神靈之所擁護能俾封疆寧謐家世悠久則誠寡人之願也語云祭如唯敬可以事鬼神何必求見其形聞其声而信其心驗哉凡爾士當觀火之性用以察鬼神情狀則庶幾乎得其実矣

寛政辛亥冬十一月

佐倉侯 紀 正順 立

二、房総志料続篇

(中村、三三〇頁)

○印 本篇

中村国香子蘭述

●印 続篇

田丸健良三折集

△印 評註

立野良道

卷之一 (夷隅郡夷隅町万木) (三三六頁)

○萬喜城の麓に妙見の神祠あり、秋社に鞆の戯あり、太平記の古俗と見ゆ。土俗其名をつくまひと云。つくまひ名義不詳。●妙見の祭礼は七月廿二日なり、つくまひと云ふは、長さ凡四丈七八尺程の柱二本建、白布にて包、上を十の字の形に作り、木綿綱を二通り張、これをたぐりて舞ふ。両足をつなからみ、さかさまになりて、扇をもつて扇ぎ杯するなり、両柱の間へ床をあげ、笛太鼓にて拍子をとる。拍子そろはぬ時は舞人落ると、見るもの膽をひやす、但舞人二人一人宛舞ふ。獅子の面を蒙り、白き衣服を着す。

頭注 鞆の戯、土俗津久舞と云ふ、蓋し古俗民間に存するもの由来久し

卷之五 (長生郡睦沢町岩井) (四一七頁)

○岩井村の秋社に、童部の浄衣著たるか、肩輿に駕し、神輿の前駆となる、式甚嚴重、其名をかうをしといふ、かうおし

名義不詳、按に鎌倉志に載所、頼朝の文に、神主をかうぬしと書り、かくあればかうは神也、をは余声東国の訛言、しは尸字、神尸といふ事なるべし。△良道曰、新編鎌倉志一の九丁神主家伝文書に、頼朝より大伴清元（清元）に賜はる白筆の書あり、其文左のごとし、こ（せ）ん日さんろうの時、八まんくかうぬしの事、下略。

卷之八（君津郡袖ヶ浦町三箇）（四六四頁）

○三ヶ村と云処の秋社に大なる草偶人を造、華表柱の左右に建、古文人の道俗と見へたり。●歳時に五月五日文人文虎を作る事見ゆ。

卷之一四（長狭郡）（五四二頁）

○房州の俗秋社に海藻を神籬にかく、叢祠といふとも然り、按に延喜式神料に海藻を載、左氏に蘋蘩藻菜是也。

三、南総珍（渡辺 寛）

第一編 八二、社日祭（八四二―三頁）

立春、立秋何れも第五の戌の日を社日と云、土を祭る日、土は萬物を生し人を養ふ、人の安居、五行の中か、土の徳莫大也、農人の春社に種を蒔、秋社に蒔收む、近頃都会の祭り見來、洪塗の神輿を恠へ、茶藤漣（トビロク）の一夜酒出合、毎秋日を定め神輿をいさむる祠に、大勢して、をさき、みさきと云は、清少納言（清少納言）か枕の草子に、殿上人のはみじかければ、をふさき、こさきと聞きつけて云々、先駟隨身、警蹕の声也、今頃は人より奢り、洪塗の神輿、江戸紫の襷掛、御幣かつきも馬に騎り、上総木綿の尻切も、京染の打貫浴衣、常の遣恨を濁り酒に云せ、神輿を以喧嘩道具、穴賢恐可。

（頭注）神輿の蕨手に燕を飾るあり乙鳥は春社來り秋社に去社日祭の印也

第二編 三七、社日（八八四頁）

立春立秋、何れも第五戌の日を社日と云、土を祭る、土は萬物を生し、人を養ふ、人の安居は五行の中に、土の徳大也、

百姓は春社に種を蒔、秋社に刈收、百姓の祭るは、社日講外なし、其外庚申祭杯、皆付り道家の法也、中昔より秋社の日を定め、洪塗神輿俵へ、蕨手に燕鳥を飾るは、社日を知る鳥、上總木綿の白襦袢腹を鼓し、頭を叩き酔飽し、雀躍し楽しむ、近頃は人より奢り、洪塗か漆となり江戸紫の縮緬襷、吉田に願ひ、正一位御幣かつきも馬に騎、揃の浴衣、茶麩鹿に、向ふ鉢巻腕立するを祭と心得、神輿を以喧嘩道具、追付神の罰を蒙る、穴賢々々。

(頭注) 燕は社日に来り秋社に去此鳥を菓食せし人江を渡る用心ずべし蚊龍は燕を好

四、祈願文(一八五二年)、(『佐倉藩政史要』所載)

(大野、二八〇三〇頁)

佐倉領

御城付領分百姓

総代

当子十三歳男

佐倉領分百姓一同総代之者奏上奉る歎願の事

一、〇〇甚太夫賄賂を取り非道の政事領分百姓一同難儀の事

右神慮に叶い候はば、甚太夫事方取上げ候共、一命取り殺し候とも、両様の内神慮に任せ仕るべき旨 願奉り候事

嘉永五年子八月五日

宗吾神霊

口ノ宮大神明



堀田備中守領分

又一通之書、宝珠院様御取次

百姓一同

当子十三歳男

奉上歎願の事

年寄役 何 某

郡奉行 何 某

代官役 何 某

郡方取締 何 某

梅原達治

右四人の者共、賄賂を取り諸向非分の取はからい等致し、領分一同難儀の事、よってここに、前書名前の者ども役儀取
上げ候願い、又は一命殺し候とも両様のうち、神罪、明罪ひとえに歎願奉り候事

奏上奉る

宗吾神靈

口ノ宮大明神

五、民権操志

下勝田村 重右衛門

(印旛郡、後一八頁)

山客枯瘦して四顧寂莫秋風凄其として落木蕭然たり巖霜野に降りて草色凋み鳴泉石に激して水声悲む此悽愴慘憺たるの日
居士偶々公津村に遊び又道を転じて下勝田村に至り其古跡を訪ふ同村鎮守の境内一小祠あり世直神社と称す就て里人に問

へば里人潜然として涙を拭ひつゝ云て曰く承応の昔堀田増侯^(マツ)租加税の時に際し木内氏藩政の暴虐を憤り生命を抛ちて衆群中より蹶起し領民を塗炭の中に救はんと期するや重右衛門等同心協行して生死を共にし人民惣代として江戸に至りて領主に久世侯に歎訴し百種の艱苦を嘗め一片の正義に凝りて志操を励まし事遂に成ると雖身は十里四方追放の申渡を受け異郷に流浪するに至り已にして木内氏父子磔刑の惨況を伝へ聞き天を仰て流涕し自ら髪を切て之を書信に封じ人に托して当村鎮守の社に納めしめて他の四人と同じく高野山に登り後諸国を歴遊して終に他郷不葬の鬼となりしを当時の村民其の偉徳を追費して一小祠を建立し前に鎮守の社に納めし髻を其の内陣に移して是を其の人に代へ毎歳八月四日を以て窃かに其の祭祀をなせり然れども当時の領主を憚りて五穀豊穰国家安全に事を寄せ名を世直と称せるなり云々と語り終りて暗涙潜々として衣袖に注ぎければ居士も亦共に双袂の湿るを知らざりき噫此世直神と称するはこの五氏の一人にして名を重右衛門と云ふ此人乃是なり法謚を平等厚礼居士と称す其家世々下総国印旛郡下勝田村に住し先代より氏に至るまで此土の里正たりしとなり村民能く其の義を忘れず毎歳赤飯神酒を供して之を祭る君夫れ地下に瞑すべし居士常に五氏の事蹟湮滅するを憂ひ探究撈索するに当り人の世直神を伝ふるも未だ此の古老の語りし如く詳確なるものあらず今之を記して本伝に代ふ

文 献

- 阿南市婦人ボランティア活動文化財愛護コース(編)、一九八一、
 『地神さんの調査』その二、同市教委。 1 一九八四、「北海道の地神塔の儀軌」、『札大教養紀要』二五。
 印旛郡役所(千葉県)(編)、一九一三、『千葉県印旛郡誌』。 2 一九八五、「北海道の地神塔の儀軌補遺」、『札大教養紀要』二六。
 植木直一郎、一九七〇(一〇版)、『義人宗吾伝』、宗吾霊堂(千葉 3 一九八五、「埼玉県児玉町内の社日塔」、『札大教養紀要』二七。
 県成田市)。
 梅原達治

- 大野政治（編）、一九八一（二刷）、『地藏堂通夜物語』、菴書房。
- 小笠原長和、川村優、一九七一、『千葉県の歴史』、山川出版社。
- 角川日本地名大辞典編纂委員会、一九八四、『千葉県』、角川書店。
- 川口謙二、一九八四、『関東地方の民俗信仰』、谷川健一（編）、『日本
本の神々 関東』、白水社。
- 児玉幸多、一九七七（九版）、『佐倉惣五郎』、吉川弘文館。
- 児玉幸多、伊藤好一、一九七八、『関東の風土と歴史』、山川出版
社。
- 君津郡教育会（千葉県）（編）、一九七二（影印）、『千葉県君津郡
誌』下、菴書房。
- 佐倉市史編さん委員会（編）、一九八三、『古今佐倉真佐子』、佐倉
市。
- 佐々木潤之介、一九七九、『世直し』、岩波書店。
- 佐野和史、一九七九、『五社神社』、白井永二、土岐昌訓、（編）、
『神社辞典』、東京堂出版。
- 嶋田 孝
- 1 一九七六、『雷神社御由緒』、『海上町史研究』二、（千葉県
海上郡）。
 - 2 一九七八、『田の神祭りの考察』、『海上町史研究』、（同）。
- 高崎繁雄
- 1 一九七五、『千葉県の歳時習俗』、池田秀夫、他『関東の歳
時習俗』、明玄書房。
 - 2 一九八二、『社日参り』、千葉日報社（編）、『千葉大百科事
典』、同社。
- 高橋 在久（編著）、一九七八『生きている民俗探訪 千葉』、第
一法規。
- 高橋在久、平野 馨、一九七四、『日本の民俗 千葉』、第一法規。
- 田畑治三郎、一九八五、『小動神社の第六天石像』、『日本の石仏』
三六。
- 千葉郡教育会（千葉県）（編）、一九七二（影印）、『千葉県千葉郡
誌』、菴書房。
- 千葉県、一九一九、『千葉県誌』、多田屋書店。
- 千葉県民俗文化財分布調査団（編）、一九八三、『千葉県民俗地図』
同県教育委員会、同県立上総博物館。
- 長田午狂（彦次郎）、一九六七、『実説佐倉宗吾伝』、宗吾霊堂（千
葉県成田市）。
- 中村国香、一九一四、『房総志料』、房総叢書刊行会（編）、『房総
叢書』二、同刊行会。（一部『改訂房総叢書』第三輯にしたがっ
た）、同刊行会編・発行、一九五九。
- 服部重蔵、一九八一、『東総の作神祭』、『日本の石仏』一八。
- 光町史編さん委員会（編）、一九八三、『光町史 現代編』、光町
（千葉県匝瑳郡）。
- 平野榮次、一九八四（再版）、『民間信仰と塔』、庚申懇話会（石川
博司、他）『石仏調査ハンドブック』、雄山閣。
- 松田 章、一九八四、『二宮神社』、谷川健一（編）、『日本の神々
関東』、白水社。

本埜村役場（千葉県印旛郡）（編）、一九一六、『千葉県本埜村誌』、
同役場。
八街町文化財審議会委員（編）、一九八一、『八街町の散歩みち』、

同町教委（千葉県印旛郡）。
渡辺 寛、一九一四、「南総珍」、房総叢書刊行会（編）、『房総叢
書』二、同刊行会。

正誤表

号	頁	行	誤	正
二五	七九	写真七	羽ノ浦町 羽ノ浦町内の	那賀川町大字四原 羽ノ浦町と隣接する那賀川 町にみられる
二七	一一三 一一六 一一七	五 三 四上 一五上	早雲宝 大友則弘氏 、一、一 一は	早雲古宝 大友則弘氏 、一、一 一は

Markers of Earth Deities in Imba District, Chiba Prefecture

UMEHARA Tatuji

Abstract. The author proposes one model of the diffusion system of folk culture elements in his previous paper. Most peasant societies of Japan have their Earth Deity cult in various forms for their good crops. Among them, some creeds are associated with installations of peculiar pentagonal pillars. This doctrine was designed by ŌE Kyōkushitsu and published about 1781 in the book entitled “*Shanichi Shōgi*”. Perhaps, people set up the markers according to this doctrine and performed the rites at semi-annual holiday called *shanichi*. So the author names this kind of markers “*Shōgi*-type”.

It is possible that his doctrine was shared and handed down by scholars all parts of Japan regardless of the geographical settings. Thus, this sort of the markers appears not merely sporadically, but in group patterns in several districts. It may be ascribed to the influences exerted by local authorities in each district. Tokushima Prefecture including Awaji Island (now, a part of Hyōgo Prefecture) is the most salient example of this diffusion type. There, the feudal lord promulgated the decree to enshrine an Earth Deities in each village in 1790. Now, the author presents another case possibly applicable to this model. A number of markers scatter within the area where was in domain of Sakura Clan around 1800 and “*Imba Gun Shi*” (The History of Imba County) says that the shrine *i. e.* stone marker, was founded by the order of the clan lord, repeatedly. Though the mechanism of the diffusion and installation of the markers are same in both areas, the difference in distribution pattern is found between them. It is caused from the characteristic disposal of feudal lords in Tokugawa hegemony. Additionally, considerations refer to the relation between the Hotta Family, the Lord of Sakura Clan and Sōgo, the martyr of the agrarian movement in Sakura Clan in 1640.

Errata (J. Fac. Educ. Sapporo Univ.)

no.	p.	l.	wrong	right
27	120	1	Honring	Honoring